

発達障がいをもつ子どもたちの サポートプロジェクト

代表者 廣瀬 亜里紗 (医学部看護学科3年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、高松平和病院主催の障がい児サークルへボランティアとして参加することで、活動を通して自閉症、発達障がいを抱える子供たちや家族の現状を理解し、医学生としての今後の学習に何か活かせることをみつけようとするものです。

2. 実施期間 (実施日)

平成23年5月20日 から 平成24年3月31日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業は、今年度の高松平和病院主催の障がい児サークルの活動の中で、7月ボディペイント、8月穴吹川で合宿、9月砂遊び、10月団子づくり、11月山登り、12月サンドイッチ作りに参加しました。

7月のボディペイントでは、平和病院の駐車場で水遊び・ボディペイント・シャボン玉遊びを行いました。シャボン玉遊びでは、意識的な呼吸や息の強さの加減、自分の作りだしたシャボン玉を追いかける、シャボンの容器にストローを入れて出す細かい運動など、呼吸機能や運動機能の発達を促すとともに、他の子供と譲り合ったり、他の子供が作ったシャボン玉を追いかけたりなど、自分の外の世界に関心を持つ訓練として行いました。

9月の砂遊びでは、公園でパルバルーンを行う際にタンバリンの音に合わせてパルバルーンを動かすなど、音を聞くということで、集中を持続させる訓練として行いました。また、他の子供と一緒にパルバルーンを動かすことで協調性を養うようにしました。

10月の団子作りでは、自分が食べるものを自分で作ることによって、食べ物を作ることの大変さと大切さを理解するとともに、粉と水を混ぜ、丸めるという行為によって手技の向上により自立を促しました。また、湯や火を使うことによって、日常生活の中での危険を知り、予知力を高めるように関わりました。

11月の山登りでは、体育館でカラーボールやフラットフープ、ボーリングを利用した遊びを行いました。内容としては決められた色のカラーボールを自分のフラットフープの中に入れるボール拾い、フラットフープをたすき代わりにしてリレーをするフラットフープリレー、白いシートの上にカラーボールを乗せて揺らしたり下から見上げたりするポップコーンゲーム、ボーリングゲームを行ったりしました。これらの遊びでは、

色を見分けて区別する力や、転がりやすいボールをコントロールする力、力の加減によってボールをピンに当てて倒す力のほか、説明を集中して聞く力、ルールを理解する力、ルールを守る力などの発達を促しました。

12月のサンドイッチ作りでは、クリスマス会を兼ねて行ったため、クリスマスソングを歌う際にタンバリンでリズムをとるなどしました。これにより、リズムに合わせてタンバリンをたたくことでリズム感の発達を促しました。

これらの活動は、発達障がいを持つ子供たちの苦手とする能力について援助することで、いずれ自立することを目指して行われています。また、子供たちが活動に参加している間に保護者の方は、情報交換を行ったり、不安なことを表出しあったり、発達がい害のある子どもを持つ親同士のグループとして勉強会を行っています。

このプロジェクト事業を利用したことによって、今までとは違う活動を行うことができ、発達障がいを持つ子供たちに挑戦の幅を与えることができたと思います。また、そのことによって発達を促す範囲も増え、これから継続して活動する中で子供たちの獲得できる能力も増えていくように感じました。



(屋外での風船遊び)



(団子の感触を楽しむ)



(小さくちぎって丸める作業)



(お湯は熱いので学生と一緒に)

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、発達障がいのある子供を持つ保護者の方から「息子が毎月学生さんに会うのが楽しみで・・・」「私自身も疲れた心をリフレッシュ

シュする良い機会になってます」と声をかけていただきました。このプロジェクト事業を実施することで、まず、保護者の方の支援になっているのだと感じました。保護者の方は毎日発達障がいのある子どもと一緒に過ごしていらっしゃるが、それまで発達障がいについて深い知識を持っていたという人はほとんどおらず、また、最近注目されるようになった分野であるために、学校や地域社会の中、また、家庭においても理解されずに辛い気持ちやストレスを持っていたと考えられます。そのような状態である保護者の方が、少しの時間ではあるが、子供から離れて同じような境遇にある人と意見や情報を交換し共感し合ったり工夫を取り入れたりすることで、ストレスを軽減したり、これから子供が成長していく中でどのようなことが起こりうるかの見通しをつけたりすることができるようになったと考えられます。また、学生ボランティアや他の子供と楽しそうにしている様子を見ることで客観的に見ることもでき、気付かなかった子供の成長に気づくことができたと考えられます。また、発達障がいをもつ子供に対しても、上記に述べたような活動を行うことにより、子供たちが苦手とする能力の発達を促すことができました。これからの将来でなるべく自立した生活を送るために、能力をあげることは重要であり、社会適応を促すことができると考えます。そのため、今回行った活動は子どもたちにとって大きな影響を与えました。

本学に対しても、合宿では実施メンバーの他に広く参加者を募ったため、今まで発達障がいを持つ人と関わったことのない学生に、そのような人たちと関わる機会ができ、香川県内にも多くの発達障がいを持つ人がおり、その家族が居て、どのような活動が行われているかの一端を知ってもらうことができました。少しでも多くの人に発達障がいについて知ってもらうことで、発達障がいを持つ人が社会に適応しやすくなるだけでなく、発達障がいを持つ人はもちろんその家族が受け入れられる社会を作っていくことにもつながると感じました。



(ボール拾い)



(フラットフープリレー)

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回の活動により、診断名は同じでも子供たち一人一人に個性があり、苦手なことや得意なことも、その程度も子どもによって違うという、教科書では得ることのできない多くのことを得ることができました。また、疾患についての知識や言葉以外のコミュニケーション

コミュニケーション能力の必要性、相手の気持ちを理解すること、医療従事者、教職者として求められるものを再確認する良い機会になりました。

これから世界で生活していく中では様々な人がいて、その中には障害を持つ人もたくさんいるけれど、医療従事者として、教職者として、その人たちにも一人の人間として接し、その人のことが分からなければ理解しようとする行為が大事だと感じました。



(ポップコーンゲーム)



(道路には飛び出しません)

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今回の活動では、主催である高松平和病院の方とうまく連絡をとれず、ぎりぎりになってから、平和病院の方が企画した活動を補助するという形になることが多かったです。また、活動には教育学部の学生も参加していましたが、今回は医学部の学生のみで行っていたので、進行が上手くいかないこともありました。

今後は、このプロジェクトの有無にかかわらず、平和病院の活動に参加していきますが、その際にもっと平和病院の方と話しあう機会を持って準備をして、子供たちが楽しみながら行える活動を考えたいと思います。また、教育学部の学生とも連携して情報を交換できれば、活動がよりよいものにできると考えています。

7. 実施メンバー

代表者	廣瀬 亜里紗	(医学部3年)		
構成員	内藤 覚	(医学部4年)	青江 真吾	(医学部4年)
	岡田 怜子	(医学部4年)	白石 健太	(医学部4年)
	滝 あい	(医学部4年)	中塚 朱里	(医学部4年)
	福永 将太	(医学部4年)	古市 未来	(医学部4年)
	川上 真由	(医学部3年)	渡辺 太輔	(医学部3年)
	窪井 涼子	(医学部3年)	森本 真美	(医学部3年)
	山木 妙夏	(医学部2年)	植村 遼子	(医学部2年)
	森並 次朗	(医学部1年)	篠永 将太	(医学部1年)
	片岡 みどり	(医学部1年)		